Experience Rate of Thai Traditional Sports in the First Half of 1980's

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/462

1980年代前半におけるタイ伝統スポーツの経験率

佐　川　哲　也

Experience Rate of Thai Traditional Sports in the First Half of 1980's

Tetsuya　SAGAWA

Ⅰ．目的

タイ国の伝統スポーツ[注1)]を検討するとき，第1の課題は「タイ国における伝統スポーツは何か」であり，また，第2の課題は「タイ国における伝統スポーツはどのような変遷をたどり，現在の状況はどのようなものか」である。第1の課題については，次の2つの全国的調査が回答してくれる。

1937年にタイ国文部省によって発表された『伝統スポーツ事典』は，1930年代のタイ国全土の伝統スポーツ324種類646を報告している。タイ国の伝統スポーツを集めた最も古い資料であると思われるこの資料では，観察された地域ごとに伝統スポーツの名称，由来，実施方法，道具などが報告されている。各伝統スポーツの報告書式が統一されていないが，当時の伝統スポーツの状況を知る上での貴重な資料となっている。ゴーマラタットら(Gomaratut,C.et al.,1984)によって発表された『タイの伝統スポーツ』は，1970年代から80年代にかけての伝統スポーツを全国を対象とした聞き取り調査から報告している。この調査研究では197種類の伝統スポーツについて，名称，由来，機会，プレーヤー，道具，場所，競技方法，ルール，体育的価値の各項目について詳細に記述されている。タイ伝統スポーツ研究の大著である。

この2つの文献によってタイ国にはどのような伝統スポーツが存在したのか，それらはいつ頃・何処で実施されていたのかを確認することができる。しかも，両資料とも全国的な規模で実施され，相当数の遊びを収集記録しているので，伝統スポーツの静態的把握について高いレベルで可能である。しかしながら，両資料に記録されているタイの伝統スポーツは，「特定地域において，特定の時代に，観察された」伝統スポーツを収集した記録であり，各種伝統スポーツの伝承・実施の状況を全国を対象とした横断的把握・動態的把握とは異なっている。したがって，いつ頃，何処でどんな伝統スポーツが存在していたという事実を断片的に把握することはできても，特定の伝統スポーツのある時点における全国的な分布を示すことはできず，第2の課題に応える資料とはならない。

1988年より筆者がタイ国東北地域のウボンラーチャターニー県で実施してきた子ども遊び調査（佐川，1991，1996）によって明らかにしたことは，同地域における伝統スポーツの消失傾向の進展であり，この傾向は単に東北地域ばかりでなく，全国規模で進行しているものと推察された。しかし，そうした伝統スポーツの消失を説明する研究はなされておらず，タイ国の伝統スポーツ研究においては，消失しつつある伝統スポーツの状況を明らかにすることが大きな課題となっている。

本研究ではこうした問題関心に基づいて，タイ国の伝統スポーツの消失傾向を全国的規模で把握することを目的として，また，急激に変容する経済社会状況のなかで変容する子どもの遊戯・スポーツの状況を明らかにすることを目的として実施した調査研究について報告するものである。本報告では1980年代前半の伝統スポーツの実施状況を全国的視野から分析した。

平成13年10月1日受理

II．方法

1．標本の選定と特徴

伝統スポーツの実施者は必ずしも子どもばかりではない。しかし，子どもと成人の両者を等しく標本として調査を実施することが望ましいが，成人への調査は時間・予算などの点から標本数を全国規模で一定数確保することは難しい。これまでタイ国においで実施してきたフィールドワークによって得られた知見は，今日の成人の伝統スポーツの実施状況は子どもの実施状況と比較して小規模であり，また，祭礼などの機会に限定される傾向にある。この点を考慮して本研究においては，成人に対する調査は断念し，伝統スポーツ実施者を子どもに限定することとした。

伝統スポーツを全国規模で明らかにするためには，何よりも全国の学童または学童を代表する集団からのデータを収集することが必要である。全国の学童を対象とした調査を実施する場合，無作為抽出による調査が考えられるが，海外調査であることを考慮すると，無作為抽出によって標本を決定しようと試みても，抽出作業用の資料を請求するための手続きに日数を要する可能性や，手に入れた資料がどこまで利用できるか分からない可能性があり，容易に無作為抽出法を選択できない。そこでより実現可能な別の方法を探ることとした。筆者らは全国から集まる学童や学童を代表できる集団の集まるイベントに注目して，毎年12月１日から10日間の日程でバンコク都の国立競技場で開催されている体育大学スポーツ競技会を選び出した。同大会は全国17体育大学が参加する全国大会で，18の競技に約3000人の選手と役員が集まる大規模な競技会である。この大会を選び出した理由は，第１にこの17体育大学が全国にほぼ均一に配置されていて，全国各地域の出身者からデータを取る可能性が高いこと。第２に，同大会参加者のほとんどが，国立競技場内に設営された仮設宿舎に生活しながら競技に参加しており，大学単位でまとまった数の調査が可能であること。第３に，全国17体育大学の教官のほとんどが，同競技場内にキャンパスをもつシーナカリンウィロート大学体育学部の卒業生であり，同大学の教官の協力もとで調査依頼が比較的容易に行えると考えたからである。

このような経緯を経て，1993年12月６～８日の日程で，第19回全国体育大学スポーツ競技会の開催中に質問紙調査を実施した。配票は，17体育大学すべての仮設本部をシーナカリンウィロート大学の専任教官と訪問し，同教官を通じて調査の趣旨，回答上の注意，回収方法等について説明を行った。各大学への配票数は男子50名女子50名を原則としたが，大学によっては女子参加者が50未満の大学もあり，その場合には女子全員を対象とした。翌日の指定時間に調査票を回収したが，各大学で回収できた数にはばらつきが生じた。その理由は，調査を引き受けてくれた各大学教官の調査指示のばらつき，配票できた学生数のばらつきなどによると推察される。バンコク都内に親戚のある選手は仮設宿所には宿泊せず，調査票を受け取らなかったことも考えられる。受け入れ教官の調査指示という点では，同行して説明をしてもらった教官と受け入れ教官の面識度や受け入れ教官の職階によって回収率に差が生まれたと考えられる。例えば，普段から面識のある教官でしかも彼がその大学の学長であるという大学では回収率が高く，直接教官－生徒関係のなかった大学内職階の低い教官では回収率が低かったと予想される。回収数は1260票であり，配布数を1700票とすると回収率は推定で74.1パーセントである。本調査の場合，大学が直接小学生時代を過ごした地域を反映するものではなく，分析にあたっては，標本を全国13の教育区に再分類した（表１）。その結果，小学生時代を過ごした地域の記載のなかった者を除いた有効回答数は1209票71.1パーセントとなった。

なお，この調査の結果は各種目の遊び要件，遊び方，ルールの日本語訳とともに『タイ伝統遊戯・スポーツ地図』（佐川ほか，1998）とし

表１　教育事務所単位でみた標本数

	全体	男子	女子
全　国	1183	816	367
バンコク	65	44	21
バンコク周辺	57	39	18
最南部	50	31	19
シャム湾	155	116	39
アンダマン海	59	42	17
西部	61	43	18
中西部	58	33	25
北部南	125	97	28
北部北	94	63	31
東北部北	119	79	40
東北部東	123	67	56
東北部南	179	134	45
東部	38	28	10

注２）

て報告している。

２．調査内容と解釈

本研究の内容に関わる質問は，「あなたは，小学校時代に次に示す伝統スポーツをどのくらい実施しましたか。」であり，選択肢は「１．よく遊んだ」，「２．少し遊んだ」，「３．遊んだことがない」の三者一択であった。この質問を予備調査において選択した72種目[注3)]のそれぞれについて回答を求めた。72種目には伝統スポーツ以外に，小学生によく観察される近代スポーツを含んでいる。個々の遊びについて地方名称が異なる場合は名称を記述させ，分析の参考とした。本研究では72種目のそれぞれについて，回答された「１.」から「３.」の割合を基礎として分析を行った。「よく遊んだ」の示す値は「その地方における流行度」を示すものとして，また，「よく遊んだ」と「少し遊んだ」を合わせた値は「その地方における経験率」として見なした。すなわち，「よく遊んだ」と回答した者の割合が高い種目ほど，その種目を重点的に遊んだと理解し，値の高い種目ほどより流行した種目であると解釈した。また，「よく遊んだ」と「少し遊んだ」を合わせた割合は遊び経験であると見なし，その合計値はその遊びがその地域に存在していたと見なせるかどうかの可能性を示すものとして理解した。「値が高い種目ほど経験率が高い」あるいは「値が高い遊びはその地域により定着していた」ことを示すものと解釈した。

この体育大学の学生を調査対象（標本）としたことで，全国規模の調査を実施することは可能となったが，この集団を全国の一般的学童という母集団の標本と見なすことは困難となった。すなわち，タイ国における1993年度の大学進学率を示す適切な数字を示すことはできないが，1994年度の高等学校進学率が42.3%であることから推察すると，大学進学率はそれよりもかなり少ないと推察され，体育大学学生でタイ国の一般的な子どもを代表することは困難であると判断せざるを得なくなった。あくまで，この結果の解釈は体育大学生の学童期の伝統スポーツの状況であると見なすことが妥当であろう。仮にある回答者の1993年時点の年齢が20歳で学年が２年生であるとすると，1979年に６歳の小学生ということになり，彼が小学生時代を過ごした年代は，1979～1984年ということになる。以上の試算から本研究が示す結果は，概ね1980年代前半に小学校時代を過ごした時点の伝統スポーツの実施状況はどのようであったかを示していると言える。

データの解釈に当たっては，次の点に配慮が必要である。

小学生時代の伝統スポーツの実施状況の調査対象として大学生を選択したことによる誤差を指摘しなければならない。すなわち，調査実施時期と調査対象時期のギャップである。質問内容は小学生時代を過ごした時点に関する質問であり，記憶に拠らざるを得ない調査上の曖昧さを誤差として認識しておく必要がある。

また，完全には解決することの困難な単純ミスなどの非標本誤差の中に，調査内容上の問題を指摘しなければならない。それは，伝統スポーツの呼称が引き起こす問題である。伝統スポーツは地域性に特徴があるため，地域差を考慮し

なければならない。例えば，本調査で用いた伝統スポーツ名はウボンラーチャターニー県を中心とする東北地方でよく使用されている呼称を基準として採用したため，言語的距離の遠い地域の者には遊び内容の特定が困難なものも含まれていたと思われる[注4)]。伝統スポーツは地域固有の名称が多く，同じ遊戯であっても地方によって呼称が違っていたり，呼称が同じでも遊び内容が必ずしも同じでないことも予想される。

III．結果と考察

1．全国の伝統スポーツ経験状況

タイ国の小学生たちは1980年代前半にいったいどのような伝統スポーツを実施していたのだろうか。全国のデータを用いた経験率の分析から，伝統スポーツ実施の概要を検討する。

表2は，調査対象とした72種目のうち経験率50パーセント以上を示した全国の結果を男女別に示したものである。

男子にみられる特徴は次の4点である。

ア．経験率50パーセント以上の伝統スポーツ・近代スポーツは，対象72種目のうち35種目であった。

イ．近代スポーツ種目が経験率の最上位を占めている。

ウ．学校体育で扱われている種目が経験率の上位を占めている。

エ．伝統スポーツが経験率の上位に含まれる。

男子で経験率50パーセント以上の伝統スポーツ・近代スポーツは，調査対象72種目のうち35種目であった。経験率80パーセント以上の上位種目に注目すると，「サッカー」がもっとも高く93.1パーセントであった。次いで「卓球」「バレーボール」「タクロー[注5)]」と近代スポーツ種目が最上位を占めた。男子の伝統スポーツ・近代スポーツ経験率が80パーセントを超えた11種目のうち4種目が近代スポーツであった。

「かけっこ」は競走であり，体育の授業を反映した運動遊びであると理解される。「プリウ走」及び「なわ跳び」も体育の授業で実施されることが多い。また，「綱引き」はタイ国の伝統スポーツであるが，小学校で開催される競技会の人気種目であり，これら4種目は学校における教科体育及び特別体育活動の影響を強く受けた種目と理解される。さらに，先に近代スポーツとして取り上げた「サッカー」「卓球」「バレーボール」の3種目はタイ国文部省が体育のカリキュラムに採用している運動領域であることを考慮すると，11種目中7種目が学校体育の影響を受けていると解釈される。

経験率80パーセント以上を示した「凧あげ」

表2　全国の経験率

男子		女子	
サッカー	93.1	ヘビのしっぽ	91.5
卓球	88.9	モンさんのハンカチ	89.6
バレーボール	88.6	バレーボール	89.1
タクロー	88.4	プリウ走	88.6
凧あげ	88.2	綱引き	88.5
かけっこ	87.3	かけっこ	88.1
綱引き	87.0	ゴム跳び	88.0
プリウ走	85.5	とおりゃんせ	88.0
なわ跳び	84.1	なわ跳び	87.0
モンさんのハンカチ	84.0	お手玉	86.4
ヘビのしっぽ	83.0	卓球	85.8
水泳	79.9	輪ゴム吹き	83.3
ナンサティック	79.9	鬼ごっこ	82.6
輪ゴム吹き	78.7	凧あげ	81.0
お手玉	77.8	片足うさぎ	77.9
鬼ごっこ	77.2	サッカー	77.7
とおりゃんせ	76.7	ナンサティック	75.2
自転車乗り	75.8	タゥーイ	74.9
ゴム跳び	75.7	足かけ跳び	74.1
ムアイ	74.1	陣取り	72.2
警察と泥棒	72.9	輪投げ	71.4
足かけ跳び	72.6	水泳	70.6
陣取り	71.5	自転車乗り	70.1
片足うさぎ	70.1	牛喰い虎	69.5
牛喰い虎	67.9	警察と泥棒	68.1
輪投げ	66.3	タクロー	67.5
独楽	65.9	独楽	65.4
タゥーイ	63.2	ティーチャップ	64.8
鋤車	62.3	風船遊び	62.9
風船遊び	61.4	鋤車	59.4
闘鶏ごっこ	60.6	猫と焼き魚	56.9
捕虜奪い	58.7	捕虜奪い	55.9
ティーチャップ	56.8	鳥の卵	55.0
騎馬戦	52.8		
鳥の卵	50.9		

「モンさんのハンカチ」「ヘビのしっぽ」は純粋な伝遊スポーツである。

女子にみられる特徴は次の３点である。

ア．経験率50パーセント以上の伝統スポーツ・近代スポーツは，対象72種目のうち33種目であった。

イ．伝統スポーツが経験率の上位に含まれている。

ウ．学校体育で扱われている種目が経験率の上位を占めている。

女子で経験率50パーセント以上の伝統スポーツ・近代スポーツは，調査対象72種目のうち33種目であった。経験率80パーセント以上の上位種目に注目すると，「ヘビのしっぽ」が最も高く91.5パーセントを示し，以下14種目が含まれた。このうち伝統スポーツは「ヘビのしっぽ」「モンさんのハンカチ」「ゴム跳び」「とおりゃんせ」「お手玉」「輪ゴム吹き」「鬼ごっこ」「凧あげ」の８種目であった。「ゴム跳び」と「輪ゴム吹き」は輪ゴムの普及によって広く伝播した比較的新しい遊戯である。中部タイで子ども遊びのフィールドワークを行ったアンダーソン（Anderson, W.W.,1980）は「ゴム跳び」は1960年頃より観察された遊びであると報告している。

学校体育の影響を受けていると思われる種目は，「バレーボール」「プリウ走」「綱引き」「かけっこ」「なわ跳び」の５種目である。

男女を比較して次の２点が指摘された。表３は全国の経験率の男女差を示している。

ア．経験率上位の種目は男女に共通している。

イ．男子と女子を比較すると，男子は近代スポーツが上位に多く含まれているが，女子は伝統スポーツが上位に多く含まれている。

まず，経験率の高い種目に注目してみよう。経験率80パーセント以上を示した男子11種目と女子14種目のうち，９種目は男女ともに共通している。また，50パーセント以上では，男子35種目及び女子33種目のうち，32種目はともに共通していることから，概ね男子でよく経験された伝統スポーツ・近代スポーツは女子でも経験されていると判断できる。すなわち，ほとんどの伝統スポーツ・近代スポーツは男子が実施していれば女子もかなりの一致度で実施している。同様に女子が実施していれば男子もかなりの一致度で実施していることが明らかとなった。

表３　経験率の男女差

	男子	女子	差
ムアイ	74.1	40.0	34.1
タクロー	88.4	67.5	20.9
サッカー	93.1	77.7	15.4
闘鶏ごっこ	60.6	49.0	11.6
水牛乗り	48.3	38.2	10.1
とおりゃんせ	76.7	88.0	-11.3
猫と焼き魚	45.5	56.9	-11.4
タゥーイ	63.2	74.9	-11.7
ゴム跳び	75.7	88.0	-12.3

経験率上位の種目について男子と女子を比較すると，近代スポーツの経験率に男女差を確認することができる。80パーセント以上の経験率を示した種目についてみると，男子は，「サッカー」「卓球」「バレーボール」「タクロー」であるのに対して，女子は「バレーボール」「卓球」であり，近代スポーツ種目が男子に優位に経験されている。実施率を比較してみると，「サッカー」は15.4ポイント，「タクロー」は20.9ポイントと男子が顕著に優位な差を示している。特に「ムエタイ」を含むタイの拳闘である「ムアイ」は34.1ポイント女子を上回っている。これらの種目は男子に支配的な競技スポーツであることが影響していると理解される。

学校体育の内容に関わる種目では，女子の「サッカー」が80パーセントを割り込んだ以外は男女とも共通の種目が上位を占めた。

一方，伝統スポーツについてみると，女子は「ヘビのしっぽ」「モンさんのハンカチ」「ゴム跳び」「とおりゃんせ」「お手玉」「輪ゴム吹き」「鬼ごっこ」「凧あげ」の８種目であったのに対して，男子は「凧あげ」「モンさんのハンカチ」「ヘビのしっぽ」の３種目であり，女子は伝統スポーツで男子を上回っていることが明ら

かとなった。

以上のことから，1980年代前半のタイ全国の伝統スポーツ・近代スポーツの概観することができよう。すなわち，男子では，近代スポーツや学校体育内容に関わる種目が最上位を占めながらも多くの伝統スポーツが実施されていた。また，女子では男子ほど近代スポーツが優位ではないものの，近代スポーツを含む学校体育内容に関わる種目と伝統スポーツが実施されていた。伝統スポーツに注目すると女子はかなり高い割合で実施していたと考えられるが，伝統スポーツは種目によって経験率にかなりの分散がみられることから数ある伝統スポーツの中から選択的に実施していたと推察される。経験率の男女の相関は非常に高い。

2．全国の伝統スポーツ消失傾向

表4は経験率の低い種目について示している。表中に掲載した種目は経験率30パーセント以下の種目である。男子は21種目，女子は19種目が経験率の低い種目と見なされた。男女に共通して低い種目は19種目であり，このうち「芋虫鬼」「牛車競走」「棒飛ばし」「ゴー」は男女とも20パーセント以下である。表中に示された21種目はすべて伝統スポーツであった。筆者が1991年にウボンラーチャターニー県で10歳から64歳を対象として実施した調査（佐川，1996）から明らかにしたように，タイ国において伝統遊戯が消失する傾向にあるとすれば，これら経験率の低い種目は消失傾向にある種目であるといえよう。生態学の用語を借用すれば，こうした消失傾向にある種目は「絶滅危惧種目」であり，スポーツ全体の多様性から考えると，多様性が失われつつあることが示唆される状況である。

3．全国の伝統スポーツ流行率

流行率は「よく遊んだ」と回答した者の割合を示している。全国的にみて1980年代前半に流行していた伝統スポーツ・近代スポーツはどのような種目であったのだろうか。表5は調査対象とした72種目の流行率30パーセント以上の全国の結果を男女別に示したものである。

表4　経験率の低い種目

男子		女子	
芋虫鬼	16.5	棒飛ばし	12.5
牛車競走	17.6	芋虫鬼	15.5
棒飛ばし	17.7	棒押し	16.1
ゴー	18.8	牛車競走	17.4
柱登り	20.5	ゴー	17.7
穴棒	20.5	穴棒	17.9
棒押し	21.2	ティークリー	18.8
チャンチャ跳び	22.6	柱登り	19.6
水牛の杭遊び	23.9	水牛の杭遊び	19.9
牛車輪ごっこ	23.9	荷牛競走	19.9
シャトルごっこ	24.8	シャトルごっこ	21.3
亀競走	25.3	牛車輪ごっこ	21.5
棒送り	25.5	チャンチャ跳び	23.4
目隠し鬼	26.3	目隠し鬼	24.0
駒引き	26.3	亀競走	24.5
竹鉄砲	26.8	棒送り	25.7
荷牛競走	26.8	駒引き	26.2
ティークリー	27.1	親子猿競走	26.9
武器舞	28.0	竹鉄砲	28.3
親子猿競走	28.0		
革引き	28.5		

男子にみられる特徴は次の2点である。

ア．流行率30パーセント以上の伝統スポーツ・近代スポーツは72種目中15種目であった。

イ．学校体育で扱われている種目が流行率の最上位を占めている。

流行率50パーセント以上の種目に注目すると「サッカー」と「かけっこ」で，72種目中の2種目であった。流行率の値は「サッカー」66.3パーセント，「かけっこ」61.8パーセントと60パーセント台であった。6割以上の者が「よく遊んだ」と回答した結果は，大変な人気・流行の状況であったと判断されるべきであり，流行率の基準値には30パーセントを採用することが妥当であるとするならば，72種目のうち15種目が流行していたと考えられる。その内訳を伝統スポーツに注目してみると「ナンサティック」「凧あげ」「プリウ走」「輪ゴム吹き」「鬼ごっこ」「モンさんのハンカチ」「綱引き」「警察と泥棒」「タゥーイ」の9種目を挙げることがで

きる。また，近代スポーツは「サッカー」「タクロー」「バレーボール」「卓球」「自転車乗り」の５種目であった。先の経験率で指摘したとおり，流行率の最上位を占めた「サッカー」と「かけっこ」はタイ国の学校教育の影響を強く反映した結果であり，子ども遊びの流行に体育が強く影響していることが示唆される。

女子にみられる特徴は次の３点である。

ア．流行率30パーセント以上の伝統スポーツ・近代スポーツは72種目中25種目であった。

イ．伝統スポーツが多くみられる。

流行率50パーセント以上の種目は72種目中10種目であり，30パーセント以上では25種目であり，多数の種目が流行していたことが明らかとなった。特に，50パーセント以上の種目に注目すると，伝統スポーツでは，「プリウ走」「お手玉」「ゴム跳び」「モンさんのハンカチ」「ヘビのしっぽ」「輪ゴム吹き」「とおりゃんせ」「鬼ごっこ」の８種目を挙げることができきた。近代スポーツでは「バレーボール」を挙げることができる。「かけっこ」は学校体育の影響を受けた種目であると推察される。女子の場合，経験率と同様に伝統スポーツが近代スポーツよりも支配的であるといえる。

表５　全国の流行率

男子		女子	
サッカー	66.3	かけっこ	66.8
かけっこ	61.8	プリウ走	62.4
ナンサティック	49.5	お手玉	61.9
凧あげ	48.2	ゴム跳び	59.4
タクロー	46.6	モンさんのハンカチ	58.0
プリウ走	45.8	ヘビのしっぽ	56.9
バレーボール	45.5	輪ゴム吹き	56.9
輪ゴム吹き	43.3	とおりゃんせ	54.8
卓球	42.0	鬼ごっこ	54.0
鬼ごっこ	40.8	バレーボール	52.6
自転車乗り	37.3	タゥーイ	48.2
モンさんのハンカチ	34.6	綱引き	47.1
綱引き	32.1	片足うさぎ	42.2
警察と泥棒	31.5	陣取り	41.1
タゥーイ	31.0	卓球	40.6
		自転車乗り	40.1
		ティーチャップ	39.2
		なわ跳び	39.0
		ナンサティック	37.3
		牛喰い虎	36.0
		警察と泥棒	33.5
		凧あげ	33.0
		足かけ跳び	31.9
		猫と焼き魚	30.5
		輪投げ	30.5

男女を比較して次の４点が指摘された。表６は全国の流行率の男女差を示している。

ア．男女ともに流行率30パーセント以上の伝統スポーツ・近代スポーツは72種目中13種目であった。

イ．男子に特に支配的な種目は，「サッカー」「タクロー」の近代スポーツであった。

ウ．女子に特に支配的な種目は，「ゴム跳び」「お手玉」「ヘビのしっぽ」「とおりゃんせ」「モンさんのハンカチ」の伝統スポーツであった。

まず，男女に共通する流行率の高い種目についてみていく。流行率30パーセント以上の種目は「かけっこ」「ナンサティック」「凧あげ」「プリウ走」「バレーボール」「輪ゴム吹き」「卓球」「鬼ごっこ」「自転車乗り」「モンさんのハンカチ」「綱引き」「警察と泥棒」「タゥーイ」の13種目であった。このうち近代スポーツは「バレーボール」「卓球」の２種目であり，「自転車乗り」は近代的な遊戯であるといえる。また，「かけっこ」「バレーボール」「綱引き」は学校体育の影響を受けた種目であるといえよう。

流行率の差を10ポイントとして男女の違いに注目すると，男子に支配的な種目は５種目，女子に支配的な種目は20種目であった。特に男子に支配的であった種目は「サッカー」で43.1ポイント，「タクロー」で30.3ポイントであり，両種目は特に男子に支配的な近代スポーツであることが明らかとなった。逆に女子に支配な種目をみると，「ゴム跳び」37.3ポイント，「お手玉」33.1ポイント，「ヘビのしっぽ」28.7ポイント，「とおりゃんせ」24.9ポイント，「モンさんのハンカチ」23.4ポイントの５種目が顕著に男子の流行率を上回っており，すべてが伝統スポーツであった。以上のことから，流行率

表6　流行率の男女差

	男子	女子	差
サッカー	66.3	23.2	43.1
タクロー	46.6	16.3	30.3
凧あげ	48.2	33.0	15.2
ナンサティック	49.5	37.3	12.2
ムアイ	19.6	8.7	10.9
足かけ跳び	21.6	31.9	-10.3
人喰いワニ	10.8	21.3	-10.5
捕虜奪い	17.5	28.9	-11.4
輪投げ	18.4	30.5	-12.1
総領主	14.3	27.5	-13.2
鬼ごっこ	40.8	54.0	-13.2
輪ゴム吹き	43.3	56.9	-13.6
綱引き	32.1	47.1	-15.0
猫と焼き魚	15.4	30.5	-15.1
ティーチャップ	24.1	39.2	-15.1
陣取り	25.5	41.1	-15.6
なわ跳び	22.5	39.0	-16.5
プリウ走	45.8	62.4	-16.6
タゥーイ	31.0	48.2	-17.2
片足うさぎ	24.4	42.2	-17.8
モンさんのハンカチ	34.6	58.0	-23.4
とおりゃんせ	29.9	54.8	-24.9
ヘビのしっぽ	28.2	56.9	-28.7
お手玉	28.8	61.9	-33.1
ゴム跳び	22.1	59.4	-37.3

を全国的にみると男子には近代スポーツが支配的であり，女子には伝統スポーツが支配的であることが示唆された。

4．伝統スポーツの都鄙差

本調査では，伝統スポーツの実施状況に加えて出生県と郡を調査しており，出生郡が県庁所在地であるか否かによって県都と郡部という分類を行った。この分類は必ずしも都市化水準を反映したものではないが，タイ国の場合には県庁所在地以外は郡部の農村地域である県も多く，概ね都鄙差を反映した分類になっていると見なして分析を試みた。

表7は県都の経験率から郡部の経験率を減じた値のうち，比較的差の大きかった種目について示している。数値がマイナスの場合は経験率が郡部に優位であり，プラスの場合は経験率が県都に優位である。マイナスは上位20位までを，プラスは上位10位までを示した。プラスの男子は9種目がすべてである。

郡部の値が県都の値を上回った種目のうちその差が10ポイント以上であった種目は，男子が2種目で「サバー」−11.9ポイント，「猫と焼き魚」−10.3ポイントであった。どちらも伝統スポーツである。女子では，9種目が10ポイント以上であり，上位から「武器舞」−18.6ポイント，「馬の背のボール投げ」−17.5ポイントなどとなっている。これら9種目はすべて伝統スポーツである。また，表中に示された種目の経験率の低さに注目してみると，郡部で30パーセントを下回った種目は男子では4種目，女子では9種目であるのに対して，県都の男子では8種目，女子では13種目となっており，郡部に優位な種目の中には経験率の低い種目が多く含まれている。しかもその傾向は女子に顕著である。表中に示された男女各20種目のうち，全国値が最も高かった種目は男子では「輪投げ」の66.6パーセント，女子では「牛喰い虎」の69.6パーセントであり，経験率の高い種目は殆ど含まれていない。この結果は郡部に優位な種目は伝統スポーツであるが，多くの種目の経験率は低いことが明らかとなった。

県都の値が郡部の値を上回った種目についてみると，男女ともその差が10ポイント以上であった種目は存在しなかった。男子ではプラスを示した9種目のすべてが5ポイント以下であり，特に県都に支配的な種目は存在しなかった。女子でも顕著な値を示した種目は存在せず，最も大きな値を示した「片足うさぎ」でさえ8.2ポイントであった。示された値が低く必ずしも顕著な傾向であるとは言い難いものの，女子には「ボクシング」「サッカー」「バレーボール」という近代スポーツ種目が確認された。この結果は女子においては近代スポーツが郡部よりも県都に優位であることを示唆するものと推察される。表中に示された種目の経験率の値に注目

表7　経験率の都鄙差

郡部＞県都

	男子			
	県都	郡部	全国	都－郡
サバー	39.4	51.3	47.3	-11.9
猫と焼き魚	39.1	49.4	45.9	-10.3
独楽	36.5	45.8	42.7	-9.3
ティーチャップ	51.8	59.6	57.0	-7.8
捕ってみろ投げてみろ	32.5	40.1	37.5	-7.6
水牛の杭遊び	18.6	26.2	23.7	-7.6
シャトルごっこ	20.4	27.0	24.7	-6.6
輪投げ	62.4	68.7	66.6	-6.3
足跳び越し	34.0	40.1	38.0	-6.1
かくれんぼ	24.4	30.5	28.5	-6.1
駒引き	22.2	28.1	26.1	-5.9
とかげの穴もぐり	33.6	39.4	37.3	-5.8
革引き	25.1	30.7	28.8	-5.6
タゥーイ	59.9	65.3	63.5	-5.4
竹馬	36.5	41.8	40.0	-5.3
総領主	40.1	45.4	43.6	-5.3
棒飛ばし	28.8	33.9	32.2	-5.1
おとり鶏	29.9	34.8	33.2	-4.9
ティークリー	24.1	29.0	27.3	-4.9
猿のしっぽとり	37.2	42.1	40.5	-4.9

	女子			
	県都	郡部	全国	都－郡
武器舞	18.9	37.5	32.0	-18.6
馬の背のボール投げ	29.2	46.7	41.6	-17.5
ゴー	8.4	21.3	17.5	-12.9
猫と焼き魚	48.1	60.2	56.7	-12.1
革引き	23.6	35.1	31.8	-11.5
かくれんぼ	20.8	32.0	28.8	-11.2
竹馬	36.8	47.9	44.6	-11.1
牛車輪ごっこ	13.2	24.3	21.1	-11.1
サバー	31.1	41.7	38.6	-10.6
騎馬戦	37.7	46.7	44.1	-9.0
芋虫鬼	9.4	18.1	15.7	-8.7
牛車競走	11.3	19.7	17.2	-8.4
荷牛競走	14.1	22.0	19.7	-7.9
棒送り	19.8	27.4	25.2	-7.6
亀競走	19.8	26.3	24.4	-6.5
おとり鶏	27.3	33.6	31.8	-6.3
ティークリー	14.2	20.4	18.6	-6.2
柱登り	15.1	20.9	19.2	-5.8
独楽	44.3	49.8	48.2	-5.5
牛喰い虎	66.0	71.1	69.6	-5.1

県都＞郡部

	男子			
	県都	郡部	全国	都－郡
片足うさぎ	73.7	68.7	70.4	5.0
警察と泥棒	75.9	71.7	73.2	4.2
独楽	68.3	64.7	65.9	3.6
水泳	81.4	79.0	79.9	2.4
人喰いワニ	41.2	39.5	40.1	1.7
騎馬戦	54.0	52.6	53.1	1.4
竹鉄砲	27.7	26.8	27.1	0.9
烏の卵	51.1	51.0	51.0	0.1
風船遊び	61.3	61.2	61.2	0.1

	女子			
	県都	郡部	全国	都－郡
片足うさぎ	83.9	75.7	78.1	8.2
水泳	76.4	68.3	70.7	8.1
鬼ごっこ	87.7	80.7	82.7	7.0
ティーチャップ	68.9	63.3	65.0	5.6
ボクシング	44.3	39.0	40.5	5.3
サッカー	82.1	76.9	78.4	5.2
バレーボール	92.4	87.6	89.1	4.8
独楽	68.8	64.1	65.4	4.7
卓球	88.7	84.5	85.7	4.2
凧あげ	84.0	79.9	81.1	4.1

してみると，男子では「竹鉄砲」が全国値で27.1パーセントと低い値を示しただけで，多くの種目は比較的高い実施率を示している。全国値でみると男子では「水泳」の79.9パーセント，女子では「バレーボール」の89．1パーセントと，総じて経験率の高い種目がリストアップされた結果となっている。以上のことから，県都が郡部より優位な種目には経験率の高い種目が多くみられることが示された。顕著に優位な種目はないと判断できよう。

県都と郡部の比較分析の結果，伝統スポーツは郡部に優位に経験されていることが確認された。この結果は，筆者の1989年の都鄙差についての調査から報告した伝統遊びの消失化傾向，さらに1991年の世代的変遷についての調査から示した伝統遊戯の急速な消失化傾向とほぼ同様の傾向を示したものと考えられる。すなわち，タイ国の伝統スポーツの消失化傾向が進行し，都市部では大部分が消失し，農村部において僅かに実施されている状況である。その根拠は，

都市部に優位な種目は農村部においても経験率が比較的高く，両地域の間に経験率の差があまりないことである。すなわち，都市部に顕著な種目はない。一方農村部に優位な種目は比較的あるいはかなり経験率が低いこと，また，両地域の値の差の大きい種目が含まれていることである。このような結果は，まさに特定の伝統スポーツが消失傾向にあり，消失のスピードは都市部が速く，その結果として農村部の経験率が都市部の経験率よりも高く示される結果となっていると解釈される。

5．学校体育カリキュラムとその影響

タイ国文部省は『初等教育カリキュラム　仏暦2521(仏暦2533改訂)』(タイ国文部省，1992)において，体育を人格形成群科目，すなわち「よいパーソナリティを形成するための価値観や心構え，行動などの人格形成に関する科目」として位置づけるとともに，体育の内容について明示している。仏暦2521年は西暦1978年であり，2533年は1990年である。このカリキュラムは1978年に発効し，1990年に改訂が行われたものである。改訂前の資料は入手することが出来なかったが，大幅な改訂でないことを前提にこのカリキュラムの体育について検討することとした。小学3－4年で取り扱う内容は，①いろいろなゲーム及びスポーツに発展するゲーム，②リズム運動，③基本運動，④スポーツ，⑤レクリエーションであり，小学5－6年は，①リズム運動，②基本運動，③スポーツ，④運動能力テスト，⑤集団行動，⑥レクリエーションを明示している。小学1－2年の体育は人格形成群科目に内包されて実施されており，体育として独立するのは小学3年からである。体育の具体的内容は，児童が使用する教科書[注6)]の運動領域の中に確認することができる。表8は教科書(Sinthurawet, S et al.,1992)に示された体育の学習内容を学年ごとに整理したものである。

教科体育の運動領域を概観すると，3－4年次にはスポーツの発展を想定した各種ゲームが採用されている。各学年のスポーツに注目すると，3年次は「ボール運動」「チェアーボール」，4年次は「ハンドボール」，5年次は「サッカー」「バレーボール」，6年次は「バレーボール」「サッカー」「卓球」「水泳」が採用されている。「チェアーボール」はバスケットボールに類似するボールゲームで，得点は椅子(チェアー)上に立ちバスケットを持ったプレーヤーのバスケットにボールを入れることで与えられる。我が国のポートボールと性質を同じにする種目である。5年生になると児童に人気の「サッカー」と「バレーボール」が登場する。本調査においても高い経験率と流行率を示した。6年生になると「卓球」と「水泳」が追加されるが，どちらも施設の点で授業実施上の困難性を伴う種目である。基本の運動は陸上と体操で構成されるが，両種目は実施の簡易性から体育の中心的種目となっている(写真1)。陸上では，3年次で「短距離走」と「リレー走」，4年次では「走り幅跳び」，5年次では「走り高跳び」，6年次では「ハードル走」がそれぞれ追加されている。「短距離走」はすなわち「かけっこ」であり，運動の最も基本である「かけっこ」は同時に子どもの人気種目でもある。自由記述による子ども遊び調査では，この「かけっこ」のほかに「リレー走」「走り幅跳び」「走り高跳び」を回答する児童がおり，教科体育で採用している種目が

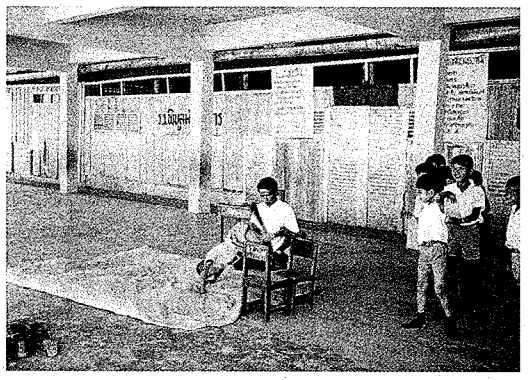

写真1　中綿の薄いマットを使ってのマット運動
(1990　ウィパークウィタヤーコン小学校にて、ウボン県)

表８　教科体育の運動領域

3年生
いろいろなゲーム
リズム体操
ダンス
身体能力（体力）作り
アクロバティクなゲーム
スポーツ
ボール運動、チェアーボール
短距離走、リレー走
走り幅跳び、走り高跳び
前回り、後ろ回り
レクリエーション活動
4年生
スポーツに発展するゲーム
いろいろなゲーム
リズム体操
創作ダンス
しゃがみ跳び、立ち跳び、柔軟・瞬発運動
登ること、ぶら下がること、転回
スポーツ
ハンドボール
短距離走、リレー走、走り幅跳び
レクリエーション活動
5年生
リズム体操
曲に合わせた隊列行動
短距離走、リレー走
身体能力（体力）測定
基本の体操
リレー活動
スポーツ
サッカー、バレーボール
走り幅跳び、走り高跳び
レクリエーション活動
6年生
曲に合わせた隊列行動
リズム体操
基本の体操
身体能力（体力）つくりと測定
逆立ち
登ること、ぶら下がること
スポーツ
バレーボール、卓球、水泳、サッカー
短距離走、リレー走、ハードル走、走り幅跳び
タイの伝統スポーツ
創作ダンス
難しい交替行動（集団行動）

遊びに発展したと理解される。６年次には集団行動が採用されることも注目される。また，６年生には「伝統スポーツ」が採用されているが，小学校で教材として習う伝統スポーツは，地域の中で伝承される伝統スポーツとは性質を異にしていると思われる。しかし，伝統スポーツという領域が採用されていることを評価したい。

小学校における体育の時間数は１時間[注7]であり，各学校の裁量に応じて体育が実施されている。生徒数の多い大規模校においては，体育専任の教官によって実施されているところもあるが，タイ国の小学校の多くは小規模校であり，殆どの場合担任によって体育が実施されている。タイ国の学校予算は少なく，体育の設備は決して整備されているとは言い難い。特に，本調査の対象となった1980年代前半では，殆どの小学校で授業に使用するボール類の数は極めて少なかったと予想される。筆者が1988年に農村の小学校を訪問した際には，学校の倉庫にほこりをかぶったサッカーボールやバレーボールを確認することができたが，殆どはパンクしていて使用不可能であり，せいぜい１・２個使用可能という状況であった（写真２）。1980年代の状況はこれ以下であったと想像される。また，何処の学校を尋ねてもサッカーゴールがグランドの中に設置されていたが，多くは木枠のみのゴールであった。体育の授業の多くは「かけっこ」であり，制服のまま裸足で走っている子どもたちが多かった。タイ国文部省が示すカリキュラムは，1980年代にはあくまで教育目標であり，殆どの小学校では実現不可能だと感じた。シーナカリンウィロート大学で体育を指導する教官も，「カリキュラムどおりに体育の授業ができるのは，バンコク都のわずかの学校だけである」と発言するほどであった。こうした状況下で実施された体育は，道具を必要としない内容，わずかの道具でみんなが実施できる内容に限定され，その結果，「かけっこ」や「リレー走」「徒手体操」「サッカー」などがその中心であったと推察される。また，５月から10月にかけて

の雨季には校庭やグランドは水浸しとなり，体育は大きく制限されることになる。1980年代前半には大屋根をもった多目的に使用される体育館はほとんどなく，雨天時には運動をするための場所を確保することが困難であったと想像される。

また，正課体育以外に近隣の小学校で開催するスポーツ競技会がある。タイ国では同一教育郡事務所内の学校がグループを作り，学校行事や学校事務を協力して行っている。このグループ単位で毎年スポーツ競技会が開催される。スポーツに適した乾季が訪れると，各小学校では12月頃に開催される対校スポーツ競技会に向けて選手団を結成し，優勝を目指して組織的な強化練習を実施する。こうした競技会は1980年代にも実施されているが，年々過熱傾向にあるようだ。筆者はこうした学校におけるスポーツ重視の傾向が子どもの遊びを大きく変容させたと考えている。本研究の中にもみられたように「サッカー」「バレーボール」「タクロー」などの近代スポーツ種目や「かけっこ」や「綱引き」などの体育種目の経験率や流行率の高さは，正課体育や課外体育の影響の表れであると解釈される。

Ⅳ．結論

本研究は1993年に実施したタイ国17体育大学生を対象とした伝統スポーツ実施状況調査から，1980年代前半に小学校高学年生を過ごした者の伝統スポーツの経験率と流行率について全国的視野から分析したものである。分析の結果，以下のことが明らかとなった。

1．経験率の分析では，男子は近代スポーツや学校体育に影響を受けた種目が最上位を占めたが，多くの伝統スポーツも実施されていた。女子は男子ほどに近代スポーツが優位に実施されてないが，近代スポーツを含む学校体育に影響を受けた種目と伝統スポーツが実施されていた。男女とも経験率の高い種目に特定の伝統スポーツ種目が含まれていた。

2．調査72種目のうち21種目は経験率が30パーセント以下であり，消失が危惧される種目である。

3．流行率の分析から，主に男子は近代スポーツに，女子は伝統スポーツに流行傾向が確認された。

4．県都と郡部の比較による都鄙差の分析から，伝統スポーツは郡部で優位に経験されていることが明らかとなった。特定の種目は消失傾向にあり，特に県都では消失傾向が進行していることが示唆された。

5．初等教育カリキュラムの検討から，経験率の高い「かけっこ」や「サッカー」などの特定の種目は学校体育の影響を受けていることが示唆された。

本研究では全国的視野からの分析にとどまっているが，タイ国はタイ族を中心とする多民族国家であり，全国には地域や民族固有の伝統スポーツが存在している。したがって，地域や民族単位での詳細な分析が必要である。また，タイ国の伝統スポーツは急速に消失が進行しており，今後とも継続的な資料の収集が必要であると考えられる。同時に，伝統スポーツを消失させるメカニズムについての分析が課題であると思われる。

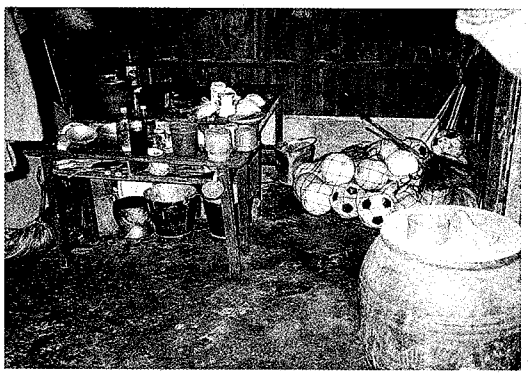

写真２　倉庫に保管されているボール類
（1988　ノーガンホーイ村小学校にて、ウボン県）

脚注

1）「スポーツ」を意味するタイ語「キーラー」は，「全身的な身体運動をともなった活動で，競争的要素をもち，しかもルールのあるような活動」として捉えられ，「ゲームや遊戯」とは区別される。本研究では，その起源をタイ国にもつスポーツを「伝統スポーツ」とし，近代以降に形成されたスポーツを「近代スポーツ」とした。「キーラー」概念の詳細については，佐川(1996)を参照されたい。

2）全国13の教育事務所は単に番号で区別されているにすぎないので，筆者が事務所の位置が分かりやすいように名称を付けている。

3）72種目の遊びは資料に示すとおりである。72種目の遊びを選択した理由は佐川（1996）を参照されたい。また，72種目の伝統スポーツの詳細は，『タイ国伝統遊戯・スポーツ地図』（佐川ら，1998）を参照されたい。

4）東北地方で使用される言語はラオ語であり，タイ語の東北訛ではない。このため，東北タイで通用する遊び名が，タイ全土では理解できないという調査実施上の問題を発生させた。その例として，本調査では「かくれんぼ」が影響を受けた。「かくれんぼ」は全国で人気のある種目であるにもかかわらず，東北地域以外では低い経験率しか示さなかった。

5）「タクロー」はアジア大会の正式種目である「セパッタクロー」を含むタイの伝統的民族スポーツである。「セパッタクロー」はタイとマレーシアで古くから庶民の間でよく実施されていた民族的スポーツで，タイ式呼称である「タクロー」とマレーシアの呼称である「セパッ・ラガ」をとって「セパッタクロー」として再構成された近代スポーツである。タイ国では古くから親しまれてきた「タクロー」には地方によって様々なプレースタイルがあるとされているが，これらを総称して「タクロー」と呼んでいる。したがって，「セパッタクロー」もタイ人にとっては同じ「タクロー」なのである。現在タイでは「セパッタクロー」のほかに「タクローロートウォン」と呼ばれる頭上の籠をゴールとしてこれに様々な蹴り方・打ち方を駆使してボールを入れるゲームがある。しかし，子どもの遊びのレベルでは，タクローボールを蹴り合う遊びすべてが「タクロー」であると理解できる。

6）体育は芸術，音楽，道徳とともに人格形成群の科目であり，4科目をひとまとめにした人格形成群テキストに含まれている。タイ語ではこの人格形成群の頭文字を採って「ソーローノー」と呼ばれている。

7）タイ国の小学校の授業単位はカープで示される。1カープは20分である。実際には3カープ1時間を1単位として実施されている。すなわち，1週間に1コマ60分で体育の授業を行っている。

文献

1）Anderson, W. W. (1980) Children's play and games in rural Thailand : a study in enculturation and socialization. Chulalongkorn University Social Research Institute. Bangkok. p140.

2）Gomaratut, C. et al (1984) Thai traditional sports : A study and analysis of Physical Education. Chulalongkorn University. Bangkok.（タイ語）

3）佐川哲也，大澤清二（1991）タイ国ウボン県における子どもの伝統遊びの消失とスポーツの普及，体育学研究36：3，pp.209－218

4）佐川哲也（1996）タイ国東北部ウボンラーチャターニ県におけるスポーツの世代的変遷，金沢大学教育学部紀要，人文科学・社会科学編45，99－115

5）佐川哲也，國土将平，大澤清二編（1998）タイ伝統遊戯・スポーツ地図，富士技術出版株式会社

6）Sinthurawet, S. et al. (1992) Text book of character building group for 3 rd grade. Watnapanich. Bangkok. pp.38－94（タイ語）

7）Sinthurawet, S. et al. (1992) Text book of character building group for 4 th grade. Watnapanich. Bangkok. pp.41－95（タイ語）

8）Sinthurawet, S. et al. (1992) Text book of character building group for 5 th grade. Watnapanich. Bangkok. pp.45－117.（タイ語）

9）Sinthurawet, S. et al. (1992) Text book of character

building group for 6 th grade. Watnapanich. Bangkok. pp.49－146.（タイ語）
10）タイ国文部省（1990）初等教育カリキュラム仏暦2521年（仏暦2533年改訂），タイ国文部省，pp72－76.（タイ語）

謝辞

この調査を実施するにあたり，調査対象大学に対し質問紙の説明に同行下さったシーナカリンウィロート大学のスッティ・パニチャロンナム先生に，書面を借りて感謝申し上げます。